

これからの総合教育センターの役割

学 長 曾 根 孝 仁



地方創生の要として、地域密着型大学の存在がクローズアップされている。きたるべき少子高齢化社会において、有望な若手人材の確保は、地域産業・医療福祉・行政にとっての死活問題である。“遠くまで出かけずとも、近くで学びたい”“自分を育ててくれた地域に貢献したい”とする要望は少なからずある。まずは“地域で育てて、地域に還す”の精神のもと、それに十分応えうる高等教育を提供する必要がある。

本学の 5 学科すべては実技・実学が中心であり、学生のニーズもまたその取得にある。いたずらに流行に惑わされることなく、まずは基礎的専門知識の習得に全力を注ぐべきであろう。現状ではリメディアル教育を要することも少なくはない。しかしながら、それも含めて、本学の学生からは貪欲に学ぼうとする熱意がビシビシと伝わってくる。たいへん喜ばしいことである。言うまでもなく、限られた時間の中で、それに最大限応えていくことが教員に求められる最優先課題である。学生による授業評価も大いに活用して、今まで以上に、日々アップデートで授業技術の向上や教育環境の改善に取り組んでいこうではありませんか。

さらに言えば、そんな学生達の卒業・生涯教育においても積極的な関わりがもてれば一歩前進である。地域共同体の中で発見された課題を共有し、その解決のための研究を協働で進めるのである。大学に求められていることは教育、研究、地域貢献の 3 つである。ともすれば自己満足的あるいは便利屋的となりがちな地域貢献だけではなく、もう少し息の長い、腰の据わった研究成果を発信できてこそ大学教員としての新たな遣り甲斐が生まれるのではないのでしょうか。まずは自分たちに何ができるのかを問いかけることから始めよう。教育、研究における大学全体の底上げを誘導し、監視し、指導することがこれからの総合教育センターの重要な役割となる。

平成 27 年度 全学 FD/SD 研修会 を実施



講演会

午前の講演会は、「ルーブリック評価スタートアップ～評価の原則から組織での活用まで～」というテーマで、高知大学 地域協働学部・大学教育創造センター 講師の 俣野秀典 先生をお迎えしました。教職員すべてで小グループをつくり、作業や交流もまじえて、ルーブリックだけでなく評価の基本から活用方法までを、たいへんわかりやすくお話いただき、教職員の理解を深められました。

FD 研修会

本学における確実な教育の質保証及び学生の学びの質向上を図るために、授業内容及び教育方法の改善を推進する組織的な研修を実施することを目的に、本年度は次の目標を立てて実施しました。

- ①目標に準拠した評価のための基準づくりの方法論について、教育方法改善の視点から理解を深める。
- ②事例を参考にアクティブ・ラーニングに関する理解を深め、具体的な学修活動のあり方について考える。
- ③この研修会で学んだことをいかして、授業や業務で主体的な学生の学びに結びつく取組を実践する。

講演に引き続いて午後からは、「事例発表」として 5 学科から『授業改善に向けた取組』を主旨とするテーマで、学生の実態、授業のようすや課題、学修成果の状況、改善に向けた取組、成果と課題、アクティブ・ラーニング等に向

けた提案などを発表しました。内容は次のとおりです。

【幼児教育学科】 今村民子 講師

『授業改善の取組:3年「子育て支援の基本」の授業を事例として』

幼児教育科の学生が保護者支援を実践的に学ぶにあたり、子育てサロンの経験をさらに深めるための内容を実施した。2年生では子育てサロン“おねえさんといっしょ”のプログラムで、親子と学生が1対1で対応して関わる支援方法や、3年生では“子育て支援の基本”の授業でファミリー・ウォッチングを実施した。後者ではフィールドワークやグループワークを通して授業改善の成果があらわれている。

【音楽総合学科】 遠藤宏幸 准教授

『クラス授業と個別授業の違い』

音楽総合学科の授業にはクラス授業や個別授業がある。クラス授業の中の「作譜」では学生の知識レベルは同じでも個々で学習内容が異なるという課題がある。そのため、個別の課題を学修するなど個別対応を中心に授業改善を行っている。個別授業の中の「専攻楽器」では、個人差が大きく、評価は主観的になりやすい。そのため、学生の自発的な学びを促進し、個々のアイデアを引き出す努力をしている。個別の到達目標が必要であるが、主観的なものに対する具体的な目標設定が難しい等の課題もある。

【デザイン美術学科】 田中久志 教授

『アクティブラーニングに関する取り組み』

デザイン美術学科の学生はまじめでおとなしく、指示通りこなすことができるという特徴がある。しかし、指示がないと動けないというマイナス面もあるため、特に演習授業においては作品の完成に向けた学生の主体的な学びを促進する必要がある。具体的には、学生の作品の進行度をチェックし、個別対応をしながら肯定的評価(ほめる)をすることを実践している。成果として学生の授業への積極的参加が行われていると感じている。

【歯科衛生学科】 岩田千鶴子 教授

『授業改善に向けた取り組み:歯科衛生学科の臨床歯科医学を視点に』

歯科衛生学科の多様な学生の実態に合わせながらできる限り学生とのコミュニケーションを心掛けている。例えば、学生が欠席した際のプリントを研究室に取りに来させている。その背景には、過去に出会った教員や学生がいる。また、授業での配布資料は、書き込み式にしたり国家試験問題を織り込むなど学生の積極的な参加を促している。結果的に学修への興味・関心が高まり、理解する喜びを感じる学生も増えたと感じる。

【看護学科】 谷 純子 講師

『技術評価に向けた取り組み:ループリックの作成』

本学の看護学の一領域である母性看護学では、概論、援助論、演習、実習の科目により構成される。その中の演習では、母性看護特有の技術や看護過程を習得する科目である。実践的な看護技術の学びに対して、技術評価となる項目と配点が定められている。その一つである沐浴技術演習に関しては、従来の評価表を基盤にループリックを作成し、今後の授業で活用していく予定である。

これらの事例発表を受けて、授業での取組や学生の実態、支援のあり方などを中心に、質疑応答がなされました。



SD研修会

SD研修会は、現在就いている職又は将来就くことが予想される職の職務と責任の遂行に必要な知識、技能等を修得させ、その他その遂行に必要な職員の能力、資質等を向上させることを目的に、次の目標を立てて行われました。

- ①事例や報告を参考に教育方法改善の視点から理解を深める。
- ②事例や報告を参考に具体的な学修活動、学生生活支援のあり方について考える。
- ③この研修で学んだことをいかして、業務で短期大学教育に結びつく取組を実践する。

講演に引き続いて午後からは、事務職員が全員参加して、本年度私立大学等経常費補助金説明会の報告、26年度私立短期大学教務担当者研修会における課題への小グループでの取組、本年度私立短期大学入試広報担当者研修会の報告等が行われ、事務局長によるSDの総括がありました。

学長による総括

FD/SD研修会の最後に、全教職員に対して学長から総括が行われ、本学が置かれている現状を認識するとともに、学生のための教育づくりに向けてさらに努力することが示されました。



平成 27 年度 総合教育センター活動計画

総合教育センターは引き続き、教務委員会や教務・広報課など事務局との連携を強化するとともに、センター内の IR 推進室の活動の充実をめざしながら、次のとおりの組織と活動計画で、取組を推進します。



□ センターの人員

- ・センター長：矢田貝真一
- ・主事・IR 推進室長：小林佐知子
- ・庶務担当：教務・広報課

□ FD/SD 専門部会（部会長：小林佐知子）

【役割】FD/SD 活動の推進と評価研究、AP(大学改革加速化)事業の検討、「見える化プロジェクト」(学修成果と評価の仕組みづくり)の推進、諸調査の計画・準備・分析、他大学との連携の推進等

・部会員：教務委員で指名されたもの

□ 共通教育専門部会（部会長：矢田貝真一）

【役割】教育プログラムの推進、生涯学習に関する企画、教養教育・リメディアル教育・リカレント教育等の学習支援関連取組の推進、COC 事業支援、「学修支援ポータル」の活用支援、教学 IR の推進等

・部会員：教務委員で指名されたもの

□ 平成 27 年度 基本方針と活動目標

1. 教育の質保証を確実にするための制度的・内容的改善をさらに推進する。

- (1) 教育基本方針の見直しと検討を確実に行之、質保証を実証的に推進できる体制づくりに努める。
- (2) 共通教育としての教養教育の充実に向けた見直しと検討を行い、新しい教養科目づくりに努める。

2. 学びの質向上のための教育的な取組を推進する。

- (1) アクティブ・ラーニングを可能とする指導・支援の充実に向けた取組を企画、推進する。
- (2) 授業改善と学修成果の検証に向けた仕組みづくりを柱とする FD 活動を積極的に企画、推進する。

3. 短期大学としての本学の特長を活かしつつ、さらなる教育改善を推進する。

- (1) 短期大学として 5 学科を有する本学の特長とその活用について、教職員に共通理解の徹底を図る。
- (2) 本学の教育改善のために「学修支援ポータル」の総合的な構築と活用の推進を確実に図る。

□ センターの業務

1. 調査の計画・実施・まとめ・報告書作成

- ・学生による授業評価[前期・後期]、満足度調査(内容作成)、初年次教育学生調査(必要に応じ)、短大生調査への協力

2. 取組の計画・実施・報告書作成・支援

- ・初年次教育スタート・プログラム、学科「総合教養演習」実施支援、教養科目「社会人教養特講」開講[前期・後期]、オープンキャンパスの支援、「見える化プロジェクト」の企画・推進、AP 事業の検討、「学修支援ポータル」の構築と活用推進、アクションプラン 2013 のとりまとめ、BP(職業実践力育成プログラム)事業の企画・実施支援

3. 教職員研修の計画・実施・まとめ・報告書作成

- ・非常勤講師打合せ[教養科目担当教員]、授業交流会の企画・実施・まとめ・報告、FD/SD 研修会の企画・実施

4. 教育実践等のまとめ

- ・「教養ミニトーク」報告書作成、「入学前教育」内容、「基礎教養テスト」問題作成・実施結果まとめ・報告書作成

5. 地域貢献事業の支援

- ・学術シンポジウムの実施支援、こども祭の実施支援

6. 広 報

- ・「センターだより」と「FD Information」の編集と発行

7. 開 発

- ・教養教育、学修評価方法の改善、短期大学教育の特長をいかした本学のあり方等の提言

8. 学外研修への参加等

- ・関係学会・フォーラム・研究会への参加と報告

9. 関係会議の開催

- ・センター会議と FD/SD 部会・共通教育部会の開催

10. その他

- ・学生相談活動の支援
- ・第三者評価・自己評価の報告(関連部分報告書作成等)
- ・カリキュラムマップ・ツリー作成に関する支援
- ・教学 IR の推進
- ・オープンキャンパス支援
- ・キャリア教育の体系化に関する支援
- ・教養科目授業関連会計とセンター会計の処理

□ 年間活動計画

4 月・「初年次教育」の計画、StartProgram 実施・報告

- ・「基礎教養テスト」結果のまとめと分析
- ・「FD Information」発行(26 年度後期授業評価報告)
- ・共通教養科目に関する諸方針案の作成
- ・26 年度「本学での教育に関する満足度調査」結果分析
- ・「社会人教養特講」の計画と実施(前期・後期)
- ・「総合教養演習」基礎教養ゼミの計画と提案・実施支援
- ・AP 事業に関する検討
- ・「学修支援ポータル」の構築計画と活用推進の取組
- ・26 年度「教育環境調査」の分析結果の報告
- ・アクションプラン 2013 の 26 年度まとめ案作成

5 月・「総合教養演習」の授業

- ・「見える化プロジェクト」検討と計画
 - ・新しい教養科目の検討
 - ・FD/SD 研修会の企画立案
- 6月・前期「授業交流会」の実施
- ・「総合教養演習」における基礎教養ゼミのまとめ
 - ・「見える化プロジェクト」実施に向けた活動
- 7月・前期「学生による授業評価」の実施
- ・前期「授業交流会」結果のまとめと分析
 - ・「総合教養演習」への支援
- 8月・前期「教養ミニトーク」のまとめ
- ・「FD/SD 研修会」の実施・運営
 - ・前期「学生による授業評価」のまとめと分析
 - ・教養学修教材の作成
 - ・教員免許状更新講習の実施支援
- 9月・「FD Information」の発行（前期授業評価結果報告）
- ・「FD/SD 研修会」報告のとりまとめ
 - ・関連学会・研究会等参加

- 10月・次年度シラバス表記内容等の検討
- ・日短協教務研修会
- 11月・後期「授業交流会」の実施
- ・次年度「入学前教育」課題のとりまとめ
- 12月・後期「授業交流会」結果のまとめと分析
- ・短大生調査実施への支援
- 1月・後期「学生による授業評価」の実施
- ・「本学での教育に関する満足度調査」内容の検討
- 2月・後期「教養ミニトーク」のまとめ
- ・次年度「基礎教養テスト」問題の作成
- 3月・関連研究会等参加（FD フォーラム；京都 他）
- ・後期「学生による授業評価」のまとめと分析



本学のアクティブ・ラーニングとは

総合教育センター 准教授 小林 佐知子



平成 20 年に FD（Faculty Development）が義務化され、大学教員は「何を教えたか」ではなく「学生が何を学んだのか」を指標として、組織的に教育改善を行う必要に迫られることになりました。最近ではアクティブ・ラーニングが奨励され、知識や技術を与えるだけでなく、学生の能動的な学習を取入れた教育方法を展開することにより、知識や技術を活用するための能力も合わせて育成することが重視されています。そのため、効果的な資料の提示やグループワークの手法など、様々な方法やツールが開発・導入されています。ただ、手法やツールを取入れることで満足してしまう可能性もあり、それについては批判的な意見も耳にします。

アクティブ・ラーニングで大学全体の学びが活性化するのは意義あることですが、そのためには個々の教員の努力と組織全体の努力の双方が必要だと考えます。後者については、本学に合ったアクティブ・ラーニングを明確化し、共通理解することです。既成服よりもオーダーメイドの服の方が体にフィットするように、本学の学生にフィットした教育とは何か、教職員全員で考えることが大切ではないでしょうか。

本年度の FD 研修会では、各学科による授業改善の取組に関する発表がありました。各学科から様々な取組が提示されましたが、その中には教員独自の取組でありながら、学科が違っても参考になる知見がありました。それらをすくい取り、積み重ねることで見えてくるものがあるかもしれません。

本学の目指すアクティブ・ラーニングとは何か。それは、学科や大学全体で意見交換をしながら知恵を出し合い、本学学生のニーズに合った効果的な方法をオーダーメイドしようと努力する中で見出されていくものだと考えます。手間はかかりますが、教職員間の対話なしでは実現することはできないと思います。今後ともよろしくお願い致します。